

出雲寺と稱せられた。天和三年以降出雲寺は金澤城内東照宮の役僧を兼勤し、次いで富原口廣岡村に移り、又三社古道に轉じ、明治元年復飾して出雲神社に神勳することになつた。

イツモジンジャ 出雲神社 金澤三社古道にある天台宗出雲寺内に勸請せられたものであつたが、明治元年寺を廢して神社とし、四十一年十一月豊岡白山神社に併合せられた。

イテ 射手 平士にして専ら弓術を習練するものを御射手といふた。文祿四年關白秀次横死の後、大島雲八の紹介を以て射手の士二百人を抱へられ、二百石充賜はり、外に弓料各三十石を賜はつたといふに起る。その後の沿革は不明であるが、元和二三年頃の士帳には、吉田左近・吉田平兵衛・吉田大藏並びに小篠五左衛門・足達勘兵衛・堀助右衛門等十九人の名がある。又寛文年間に至り、弓料として五十石を賜へられた。此の頃は組外の士の上列に居り、諸士の中射藝に堪へる輩が之に補せられ、若し勤め難ければ辭して元組に入つた。しかし父子業を繼いで勤めたものは、おのづから他組に移らぬことになつたものらしく、天和・貞享に至つて全く歴代世襲の業と定まり、列も元祿十六年二月から組外よりも下列と定められ、後に享保十九年から藝術修練の上弓料五十石を給せられることになつた。

イテイフウケイコシヨ 射手異風稽古所 金澤城内で石川御門の東北方、白鳥堀の高辨内なる三ノ丸の地にあつた。こゝは天正十二年頃村井長頼邸のあつた所であるが、天和三年の頃からこの稽古所が置かれたやうである。

イテガシラ 射手頭 ↓イテザイキヨ 射手裁許。

イテコガシラ 射手小頭 御射手小頭は役料五十石で、御射手中より撰任せられた。其の始めは不明であるが、寛文元年の頃の士籍に、永井兵右衛門が當職で役料五十石を受けたのを、その姓名の見える初とする。後奥村彦三郎・矢島半左衛門之を勤め、延寶五年正月二十四日大窪六佑・森田左助兩人に命ぜられ、亦役料五十石を賜はつた。其の後暫く廢せられ、享保九年九月廿七日改めて中西岡之丞・富田助進兩名に命ぜられ、それより連續したが、元文の頃からは一人役と成つた。

イテザイキヨ 射手裁許 御射手裁許は初め御射手頭といふた。文祿四年初めて御射手を置かれた時、吉岡九左衛門・藤掛又大夫に二十人宛を屬せしめ、次いで奥村河内榮明をこの四十人の頭としたが、まだ役名も定まらなかつた。後慶安二年吉田忠左衛門茂直・吉田平兵衛元茂が御射手頭を命ぜられ、役料二百石を賜はり、萬治二年二人共に御先弓頭を命ぜられ、御射手頭元の如く、吉田左近茂勝も御先弓頭兼御射手頭となり、三人となつた。即ち御射手頭は此の頃から物頭の兼務となつたのである。寛文十年十二月吉田左太夫茂清が命ぜられ、役料も賜はつた。延寶六年吉田茂直が死んで兩人役となつたが、名目を御射手裁許と改められたのはこの後であらう。元祿六年四月御先弓頭吉田左門茂和が當職兼務を命ぜられ、是より裁許料を與へられぬこととなり、吉田氏以外でも大組頭・御持方頭・御先弓頭たる者の兼務することになつた。

イテノキンエモン 出野金右衛門 越前府中に於いて前田利家に仕へ、三百五十石を領した。子孫世々藩に仕へる。

イテノタダナガ 出野忠備 通稱政右衛門。實は前田對馬の臣富山五郎右衛門の子で、出野檢校に養はれたもの。享保十七年三月召出され、十五人扶持を受けた。子孫相繼いだが、文政中第五代孫太郎出奔して家斷絶した。

イトウアキカツ 伊藤豊捷 通稱喜市郎。平太夫。父は甚右衛門勝政。御表小將・大小將横目から次第に昇進して御馬廻頭に至り、享保三年に二百石、九年に三百石を加へて俸八百五十石に至つた。二十年九月十二日五十五歳を以て歿。

イトウカ 伊藤綴 通稱將曹・淳八郎。初諱祐實。字は純夫。石碯と號した。祐之の子で、本多政行に仕へたが、明和八年藩主前田重政の徵す所となり、十五人扶持から俸百石に進み、御儒者に列した。寛政元年歿。その著に石碯遺文があり、子孫世々藩に仕へた。

イトウカツタカ 伊藤克孝 大聖寺藩の歩士。通稱傳右衛門。天明の比江戸の神谷定令及び富山の中田高寛に就いて、關流の算法を學び、遂にその皆傳を受け、歸藩の後算用場の吏となつて子弟に教授した。故に克孝は同藩に於ける關流算法の祖とすべく、西尾一起・河島僧短等はその高弟である。文化六年正月五十二歳で歿。

イトウシゲズミ 伊藤重澄 幼名虎之助、後平右衛門・内膳。父は重正。天和の初兄兵助正能歿し、嗣子平九郎が幼年であつた爲、重澄後を襲ぎ、幾くもなく五百石を平九郎に割いて二千石を受けた。元祿六年重澄公事擧行となり、九年四月寺社奉行を兼ね、正徳四年八百石を加へられ、享保八年六月歿した。年七十四。その寺社奉行の職にあること三十年に近かつた爲、最も舊例故格に精しく、功績従つて多かつた。

イトウシゲノブ 伊藤重延 通稱外記。元和二年初めて前田利常に仕へ、千三百石を領し、後千石を加へられた。その嫡系は第六代津兵衛祐忠に至つて斷絶した。

イトウシゲマサ 伊藤重正 通稱内膳。前田利常に仕へて千五百石を賜はり、後三千三百石となつた。寛永以後馬廻頭・高岡町奉行・算用場奉行・檢地奉行に累遷し、萬治三年人持組に列し、寛文四年退老して意休と號し、九年に歿した。

イトウスケタダ 伊藤祐忠 通稱源次郎。源太左衛門・津右衛門・津兵衛。父は津兵衛祐張。祿四百石。御使番より御持頭領に至つたが、寛政十二年四月廿一日指除き、七月十七日一門に御預け、十二月菊池大學の家に轉じ、享和元年五月十八日揚屋に入り、二年五月五日卒死して家斷絶した。

イトウスケマサ 伊東祐將 通稱平八郎。寛永二年四歳にして前田光高に召出され、次いで綱紀の奥小將を勤めて、俸三百五十石を領した。子孫世々藩に仕へる。

イトウスケユキ 伊藤祐之 通稱齋宮。字は順卿。初の名は由言、字は思忠。剡溪・白雪樓・春秋館・觀文堂と號し、後又幸野と號した。平安の人。伊藤中貞の甥で、養はれてその嗣となり、松永昌易に學び、元祿九年由貞と共に加賀藩に來た。祐之の經史に通じ、傍ら文辭を能くし、正徳元年韓使の來聘したとき、慈照院祖縁に従ひ、學士李碩等と會して屢